2025年2月9日（日）主日朝礼拝説教

『イエスを見るために』井上隆晶牧師
ヨハネの手紙一1章1～節、ルカによる福音書19章1～10節

❶【ザアカイの善い憧れ】

エリコの町にザアカイという徴税人の人がいました。徴税人たちは占領国であるローマに代わってイスラエルの民から税金を集める仕事をしていましたから、同胞から嫌われ、仲間外れにされ、礼拝共同体にも加えてもらえませんでした。ザアカイはそんな徴税人の頭で、お金持ちでした。
このザアカイが、なぜか「**イエス様がどんな人か見ようとした**」というのです。それは、自分と同じ徴税人（マタイ）を弟子にしている人がいるという噂を聞き、そのイエスというお方に興味が湧いたのでしょう。遠くから眺めるだけでも良いと思い、イエス様を見るために出かけたのです。ところが「**背が低かった**」（19：3）ために群集に遮られて見ることが出来ませんでした。しかし彼の中の見たいという願望は治まらず、何としても望みを果たそうとします。彼は走っていって先回りし、いちじく桑の木に登り、その葉の影からイエス様を見たのです。私はこの物語を読むと、エデンの園のアダムを思い出します。**その昔アダムは神の顔を避けて、園の木の間に隠れましたが、ザアカイはその神の顔を見るために木に登りました。ここに人間の回復の始まりを見ます。**ザアカイの背の低さは、私たちの弱さ、罪深さ、未熟さを象徴しています。**しかしザアカイのどうしてもイエス様を見たいという望みは、彼の弱さを克服しました。私たちがどんなに罪深くても、それは神と出会うための障害になりません。本当の障害は、罪深さではなく、キリストに期待しないことなのです。**

❷【キリストを見ることの重要さ】

この物語には、「**見ようとした**」「**見ることができなかった**」（3節）「**見るために**」（4節）「**上を見上げて**」（5節）「**これを見た人たちは**」（7節）と「**見る**」という言葉が5回も繰り返されています。人間の五感「視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚」はもともと、神を知るための道具として造られました。しかしそれは神以外のこの世に向けられるようになりました。「**女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け**」（創世記 3：6）と書かれています。善悪の知識の木とは「この世」の象徴です。最初の堕落はこの世を「**見ること**」から始まったのです。修道士たちは「悪魔は穴が空いたところから入って来る」といいましたが、目からは汚れた映像、耳からは汚れた言葉、口からは過度の飲食が入って私たちの魂は汚れてしまいました。しかし教会に来ると目からキリストの聖像イコンが入り、耳には賛美と祈りの声と神の言葉の朗読が入り、鼻には乳香の香り、口には聖体が入ります。**教会に帰ると私たちの五感が神に向かって正しくリセットされるので、私たちは本来の人に帰ることができるのです。**ですから私たちは神を見なければな

りません。しかし、目に見えない神をどうやって私たちは見るのでしょう。それはイエス様を見ることです。イエス様自ら「**私を見た者は父（なる神）を見たのである**」といい、聖パウロは「**御子は、見えない神の姿であり**」（コロサイ１：15）といい、ヘブライ書は「**御子は…神の本質の完全な現われであり**」（ヘブライ１：3）と言われているからです。キリストを見ることが、神を見ることになるのです。しかし、私たちは神を見ることの絶大な効果を知ろうとしません。この世の物が自分を満たすと思って、神よりもこの世の物を見ようとします。しかし聖書を見て下さい。イエス様はいちじく桑の木の下まで来ると足を止められ、上を見上げて言われました。「**ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。**」（19：5）**驚くべきことに、イエス様の方からザアカイに声をかけられ、交わりを求められました。**主は彼の名だけでなく、彼がどんな人間か、どんな罪を犯したかをすべて知っておられながら彼との交わりを強く求められたのです。ザアカイは自分がイエス様を求める以上に、イエス様が自分を求めていたこと、自分が知る前から、自分は知られていたことを知りました。ザアカイはうれしかったと思います。彼は急いで木から降りてきて、喜んでイエス様を家に迎え入れました。このように**私たちがキリストを見た時、キリストも私たちをご覧になり、互いの目線が会うのです。その時、大いなる祝福が入って来るのです。キリストを見る事の絶大な効果を教えているのです。「私はあなたの親友になりたい」と、主が望んでおられる事は私たちに勇気を与えます。あなたも恐れず高い所から降りて来なさい。背伸びをせず、立派にならずとも主はあなたと親友になりたいのです。この時、ザアカイの五感と全身は、この世ではなくキリストに向いていました。それを回心といいます。回心とは自分の過ちを悔いることではなく、私たちの全身（命）をキリストに向けることなのです。**

❸【キリスト中心の生活を始める事】

ザアカイは立ち上がりイエス様に言いました。「**私は、財産の半分を貧しい人に施します。また、誰かから、何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。**」（8節）ユダヤの律法では、盗んだ物を返すときは二倍でした。ところがそれを四倍にして返し、しかも財産の半分を貧しい人に与えるというのです。それほどにイエス様との出会いは彼を満たしてしまいました。ザアカイは生活が 180 度変わったのです。彼はその後、ペトロの弟子となり、カイザリアの主教になったそうです。イエス様は言われます。「**今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。**」（9～10節）

キリストがこの世に来られた目的は、「**失われた人を捜すため**」でした。「**失われた**」とは、ある物が本来あるべき所から離れ、誤った所に置かれている状態をいいます。人は神の側に置かれるように創造されました。ですから生活が、神中心とした生活、キリスト中心の生活に変わらなければならないのです。**生活が変わること、この世中心から、神の国中心に変わること、この世に死に、神の国に生**

きること、この世の価値観を捨て、キリストの価値観に変わるのです。そのために私たちはキリストによって新しく創造されたのだと思うのです。すべて神の国の生活の為です。朝の祈りの時にそのことをとても強く感じました。

●明治に内村鑑三という牧師がいましたが、明治天皇の署名に敬礼しなったというので非難されました。彼は天皇への反感からしたのではありません。「あの瞬間、私に敬礼をいなませたものは拒否ではなく、実はためらいと良心のとがめだったのです。」と言っています。村本一生という人が、太平洋戦争中兵役を拒否しました。戦後、彼は「どうかかまわずにほっといて下さい。私はただ、神の前で良心に従っただけです。自負も感慨もありません。」と言いました。**彼らはこの世に死に、神の国に生きていたからこそそうしたのです。**また、同志社の神学部に村上と云う先生がいました。優秀な人で信仰も厚く、将来の同志社を担う人として期待されていましたが、太平洋戦争末期に召集され、樺太で敗戦を迎えました。ソ連の捕虜となり、伐採作業に従事しました。そこでの生活、特に食物はひどいものでした。わらの入った黒いパン、湯のようなスープ、腐りかけたニシン、それもほんの僅かでした。そのため捕虜となった人たちは互いに食物を奪い合うような生活をしていました。しかし先生はその中で毎朝、髭を剃り、きちんと服装を整え、騒がしい中で静かに聖書を読んでいました。ノルマが達成できなくて、わずかな食物を減らされる人に、黙って自分の食物を与えていました。階級は二等兵でしたが、しだいに人々の驚異が尊敬に変わり、敬愛されるようになりました。しかし伐採の時、木の下敷きとなり、その地で亡くなりました。引き上げの日が来て、先生と一緒に働いた人たちは、自分の持ち物は何一つ持たず、みんなで手分けして先生の遺品を持ち帰り、先生の妻に届けたそうです。それは聖書、讃美歌、神学書でした。村上先生も、この世ではない別の世界に生きていたのだと思います。

「**世の事に関わっている人は、かかわりのない人の様にすべきです。**」（Ⅰコリント７：31）とか「**世も世にあるものも、愛してはいけません**」（Ⅰヨハネ２：15）と言われていますが、残念ながら今のクリスチャンはこの世中心に生きているように感じるのです。この世の課題ばかりに熱心に取り組んでいるからです。**この世に死んでいませんから、神の国にも生きていないのです。だからこの世の事で議論し、裁き合うのです。**私は修道士たちの生活にとても憧れます。天国の香りがするからです。**キリストは皆さんをこの世から引き出し、天国に集めたのだという事を忘れないでください。そのために皆さんは新しく創造されたのだという事を忘れないでください。そして残された時間で、天国の生活をどうか身につけていただきたいと思います。**